

近世の祇園社の景観とその周囲との接続に関する研究* Landscape of Gion-shrine & Juncture with Surroundings in Edo Era*

出村嘉史**・川崎雅史**

By Yoshifumi DEMURA**・Masashi KAWASAKI**

1. 研究の背景と目的

(1) 背景と目的

日本において都市近郊の丘陵地・山辺は、その場所的な優位性によって、活動領域として古くから人に好まれてきた。特に京都では、都市に極めて近い位置に山辺を有し、南禅寺周辺の名所が集積する地域や、清水寺や高台寺を含む地域など、広範囲にわたる領域において、山とまちとのバランスを慮りながら丁寧に開発された総体の例が多く見られる。このように領域として捉えられる空間のまとまり（これを本論では「景域」とする）は、人々がそれぞれの愉しみのために集い、特有の文化を発達させた重要な背景であったと考えられる。都市が魅力的な生活の場所であるためには、その内部にこのような景域を多く含むことが望ましいと考える。こうした景域の創造を計画するためには、景域を構成する一つ一つの空間要素と、それらの適切な空間的接続の方法を理解することが必要であり、過去あるいは現在において良質に構成された景域の例を分析することが、有意義であると考えられる。

山と都市が地理的に密接な関係にある祇園・円山地域では、その場における遊興の文化に基づく空間構成が、古くより発達してきたことが知られている¹⁾。本論では、その中でも祇園感神院（祇園社：現在の八坂神社）周辺を対象とする。名所図会などの絵画史料や、八坂神社文書および当時の文化人による旅行記や随筆などの文献史料から、近世における周囲の街の形成と併せて培われた境内外の景域の構成を明らかにし、景域内部における要素の接続に関する空間的情報を整理する事を目的とする。

(2) 既往研究と本論の位置づけ

京都の山辺における空間的問題に着目した既往の研究としては、山田²⁾の、山裾敷地における空間マネジメントに関する研究があるが、山辺の微地形の中における敷地の立地（占地）に関する考察を主としており、敷地周囲との直接的なつながりは分析されていない。また、現

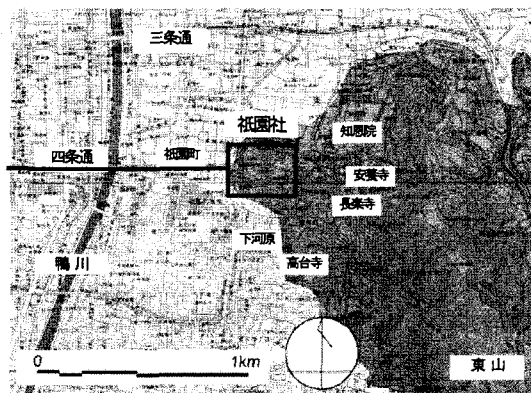


図1 東山から市街地へ突きだした祇園社

在の山辺の空間を考察するにあたり、過去における形成プロセスを明らかにした研究は、近代の空間形成を郊外開発として捉えたもの³⁾が中心である。しかし、特殊な地形の上に展開された遊興空間の形成過程に着目し、その空間的接続について考察した研究はこれまでにない。空間的接続がいかに総体としての景域を形作っているのかを明らかにすることが、本論の提示する視点である。

2. 対象地の地理的特異性

祇園社（今の八坂神社）の起源については諸説あるが、いずれにしても古代には祇園感神院という神仏習合の社であり、特に10世紀末から近世が終わるまでは天台宗延暦寺に属していた。祇園社は古くから、南にある八坂郷の鎮守であり、社殿と正門は南面していた。また祇園会などの信仰を通して、鴨川を挟んで対する洛中と、深い関係を持っていた⁴⁾。

この領域の位置は、図1に見るように東山の麓の、とりわけ市街地の方へ突きだした崎にあたる。はじめ門前が南側へ開いて発達したが（図中の下河原周辺）、もう一方で直接市街地からアクセスする西門が重要視され、西門の前にも門前町のような賑わいが発達した（図中の祇園町周辺）。

祇園社の領域は概ね、楼門前と西大門前の二つの門前領域、広い境内、そして境内の裏に当たる北林（祇園林）の3つの部分（次頁図2）と、その全体の東に位置する三院七坊の宿坊から成ると理解される。各部分がそ

*キーワードズ：祇園社、山辺の空間構成、接続、景域

**正会員、工博、京都大学大学院工学研究科

(京都市左京区吉田本町 TEL:075-753-5123

e-mail: demu@ningen1.gee.kyoto-u.ac.jp)

れぞれ異なる周囲の環境へ開かれており、それ故に場所の性格が異なっていた。

鴨川から東山へ続く断面(図3)を参考にすれば、景勝地と町が接するところに存在して、祇園社の地形的特徴を把握する事ができる。すなわち、鴨川から東は傾斜の緩い平らな地形が続き、にわかに傾斜が変化するところに祇園社の敷地がとられている。祇園社の東西断面における平均傾斜は5%程度で、さらに東の真葛ヶ原、円山安養寺へと登るにつれて傾斜は急になる。地形からみても祇園社は、街と山の狭間に構えた境界領域であった。

3. 門前：まちとのつながり

(1) 祇園社楼門と二軒茶屋

祇園社楼門から南へ続く下河原道は、中世には「百度大路」、その後祇園社の表参道として「祇園大路」などと称された(『八坂神社文書』)⁹⁾。この道沿いは、桃山時代に清水寺から祇園社までの行程のみを題材とした『東山遊楽図屏風』(高津家本)⁹⁾が存在するように、古くから遊楽の地とされた。近世の始めには「遊女かましきもの」が商売をする遊興施設が点在しており⁷⁾、続いて安永9年(1780)から天明元年(1781)にかけて祇園社の南に存在した南林が開発されて⁸⁾、高台寺門前から祇園社門前までが、「下河原」と呼ばれる花街となった(図4⁹⁾)。そして、この賑わいと連続して、南の鳥居の内側(門前)に二軒茶屋が繁盛した。

この門前空間は中世には既に存在しており、16世紀の『洛中洛外図屏風』にも門前茶屋の姿を確認できる。近世において、この門前空間を形づくる要素は、参道を挟み向かい合って建つ二軒の茶屋と、楼門と鳥居である(図5)。この空間構成は単純なものであったが、現在の門前から推察できるように、囲まれた空間は基本的には参道であるが、図6にみるように、両側の店舗の内部空間が外へ開け放たれており、幅6間程度の囲まれた空間は、広場的な働きをしていた。

ここの名物は「祇園豆腐」といわれた豆腐の田楽であり、『十国巡覧記』に「豆腐名物也。彼麗婢紅前垂して田楽を勧め、旅人を牽。豆腐を剪に操刀の速なり。神妙実人に人を脅かす斗也¹⁰⁾」と描かれているように、芸を見せて客引きをする事も行われていた。また本居宣長の『在京日記』には、二軒茶屋に立ち寄った記述、あるいは人が多すぎて寄れなかった記述などが多く書かれており¹¹⁾、また『花洛名勝図会』に描かれた祇園社境内に「秋知らぬうちわの音や二軒茶屋¹²⁾」と門前の賑わいを描写した歌が添えられた。

このように、門前空間そのものが、一つの名所として知られていた事が分かる。二軒の掛茶屋による演出により、門前の空間は賑わった。



図2 祇園社の門前・境内・祇園林(花洛名勝図会)

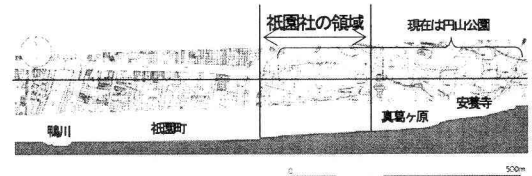


図3 祇園社周辺の地形断面(境内を通り東西の断面)

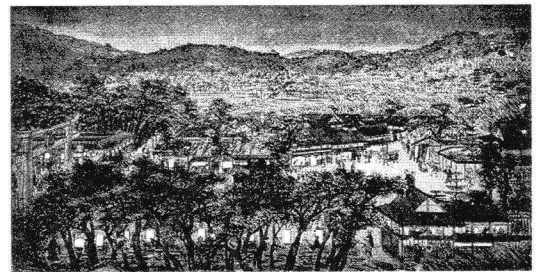


図4 門前から下河原にかけての夜景(円山応挙画)

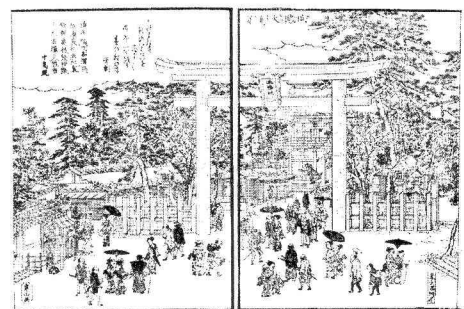


図5 大鳥居の向こうに二軒茶屋(花洛名勝図会)

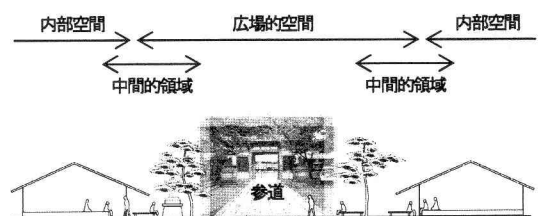


図6 二軒茶屋の門前空間モデル(筆者作成)

(2) 西門と祇園町

西門前の市街地化の歴史は非常に古く、久寿元年(1154)に「祇園橋供養」(『百鍊抄』)が記録されていることから、平安時代の末には架橋に伴って洛中から四条大路が延長し、参詣道としての「西大門大路」が形成されたと考えられている¹³⁾。しかし、これは江戸の初期には幅3間に満たない畦道で、鴨川に架かる仮設の四条橋から祇園社南門前の二軒茶屋の灯が見通せるほど閑散としていたという¹⁴⁾。

ここに新町が出来た顛末には、鴨川の治水が関係していた。洪水の度に流路を変えていた鴨川に、寛文8年(1668)石垣護岸が築かれて、その後の治水が角倉了以に任されると、河川と町地との区別が明確になった¹⁵⁾。これを期に寛文10年(1670)に鴨川東沿いに外六町が開かれ、やがて正徳3年(1713)には内六町が開かれて、四条河原から祇園社までが一続きの遊興地として成立した¹⁶⁾。それまで河原周辺に仮設的に建っていた芝居などの遊興の装置が、道の両脇に揃えて固定化されて出来た四条橋東詰の芝居小屋から、軒並みを揃えた茶屋の並びを経て東山の祇園社へ向かう、連続した賑わいの景観(図7¹⁷⁾、図8¹⁸⁾)が成立した。

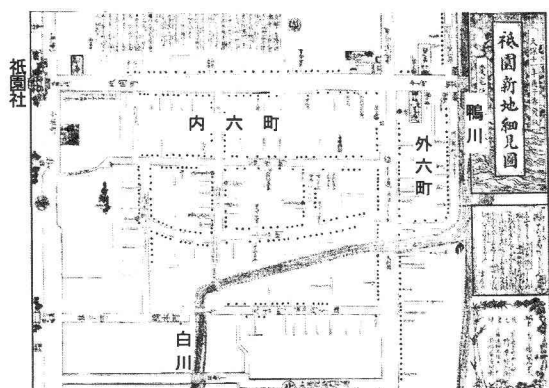


図7 天保11年(1840)の祇園新町案内(下が北)



図8 四条河原から祇園社への道(円山応挙画)

4. 祇園社境内の賑わい

図9は『花洛名勝図会』に描かれた祇園社である。境内には大勢の人が参拝に来ている姿が描かれている。江戸後期に、霊場・霊仏への庶民の巡礼が非常に盛んであった¹⁹⁾という背景もあるが、祇園社の境内は、参拝客が集まるだけではなく、都市に住む人々にとっての重要な遊びの場であった。本居宣長は境内の様子を『在京日記』に「この御社は人たえず、能なども侍る、物まねやうの者も侍りける²⁰⁾」と書いており、これが記された宝暦7年(1757)には、祇園社の境内は能や物まねといった芸能を披露する場となっていたことがわかる。さらに十返舎一九は『東海道中膝栗毛』の中で「参詣日に群集し、茶店あまた祇園香煎の匂ひ高く、齒磨うりの居合抜、売菓のいひたて、うき世のものまね能狂言、境内に所せきまでみちみちたり²¹⁾」と描写した。誇張はあるとしても大方の様子をここから把握することができ、文中の「茶店」は先の図9の中にも複数確認できる。

この『花洛名勝図会』は1859年発行であり、1780年に発行された『都名所図絵』に描かれた図10(次頁)と比べると、無くなった建築や、新しく設けられた建築が幾つかある事に気が付く。中でも注目すべきは、『花洛名勝図会』の境内に「茶店」が多数描かれていることである。これは『都名所図絵』に描かれた境内には見出せない(二軒茶屋と類似の屋根を持つ小屋が、薬師堂の南に1軒見られるのみである)。先の『在京日記』に記述されたように、18世紀には様々な芸能が境内において繰り広げられていたが、さらに19世紀になるとこれらの遊興のために、茶店までもが建てられ、境内に門前のような領域が形成されたと考えられる。図9に見るように、これらの茶店は、境内の南西部に集中していた。

境内の平面構成や要素の配置は、現在の地形を参考にして、次のように捉えられる。敷地は全体として5%程の緩斜面上であるが、さらに全体は二段に分かれている。本殿を含む上段と、西門や絵馬堂を含む下段は、2m程のギャップを持つ石垣で分けられている。本殿や拝殿は、



図9 八坂神社境内の様子(花洛名勝図会)

玉垣、中門などで囲われていた。

境内の主立った建造物は先に述べたように南向きを正面としている。本殿や拝殿は、石鳥居から始まり楼門を貫く直線状の参道で結ばれている。これが一つの軸となるが、境内はこれと交わり東西方向の軸をもう一つ持つ。これは祇園町から続く軸で、先に見たように四条河原から真っ直ぐ通ってきた道である。この軸は境内に至ると、西門から南へ逸れて曲がり、拝殿の前を通り東へ抜ける。これら二つの軸を基準に、堂宇が建てられていた。

これらを取り巻いて、北と東側には細かな摂社末社が並び、西と南側の街へとそれぞれつながる西門と楼門の間の領域には茶店などが並んだ。茶店のある場所は下段にあたり、下段は特に遊興空間の性格が強かったと考えられる。以上の構成上の要点を図11(下)にまとめる。

5. 山辺としての空間構成

(1) 祇園林の景観

祇園林とは、祇園社境内と周辺の森林の総称である。ここは古くから参詣者と遊樂者で賑わい、桃山時代より幾多の絵画に、楼門前および境内付近の森林に入って敷物を敷き、幕を張って座敷を作って遊びに興じる人々が描写されている。江戸時代には、北林・南林に分かれており²⁰⁾、南林は下河原へ続く町並みへと次第に開発されていったと考えられる。

一方、宝暦3年(1754)「祇園社の北地、林を開きて之を広げ、桜を植²⁰⁾」えたことが、本居宣長の『在京日記』に記述されており、北林においても同様の愉しみのための工夫がされた事が分かる。図12は、祇園林夜桜の様子であるが、ここに用いられた掛茶屋は、屋根とそれを支える柱のみからなる簡単なつくりの建築で、桜の林の中に出てだけ身を晒し、一体感を愉しむ方法であると考えられる。このように祇園社の北林では、桜の名所たる林という、都市生活にとっては非日常の環境をそのまま愉しむために、仮設的な装置(簡易な茶店、敷物、宴幕、飲食するもの)が持ち込まれていた。

さらに『花洛名勝図会』には、「社頭の北いにしへは雑木林なりしが、今は彼岸桜数株を植て花の頃はし

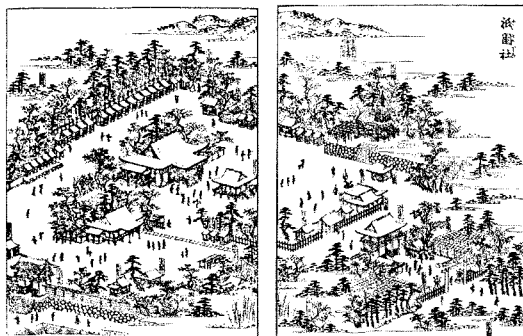


図10 八坂神社境内の様子(都名所図会)



図12 祇園林夜桜(花洛名勝図会)

ほ美観なり。この林中、借馬の馬場、大弓の射場、楊弓店、栗飯の貸食家(りょうりや)等あまたありて、遊客常に群集ひ暑寒をいとはず賑はし。又近年此所をひらき勸進大相撲を興行し大に流行せり。されば月下の風流より弓馬の調練、酒食の設けに至る迄調ひて、実に雅俗兼用して繁昌の地といふべし²⁰⁾と祇園北林の賑わいが記述されている。

この勸進大相撲の跡地は、明治初期の『八坂神社境内外区別実測図』(図13)に確認でき²⁰⁾、図9の右上には弓の射場が描かれている。この周辺に馬場、射的上、料理屋が並び、桜などの季節に関わりなく賑わっていたと考えられる。その空間的構成については記述されていないが、図中相撲場以外は林並藪という区分になっていることから、林中に紛れて「祇園夜桜」に描かれたような簡易な建築物が雑多に展開する遊び場の界隈が形成され

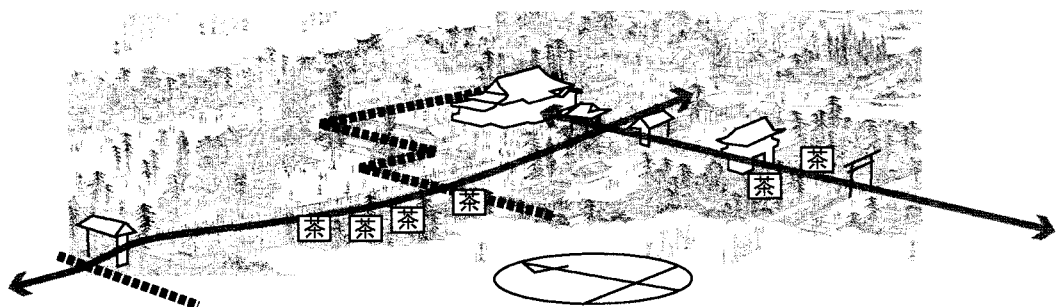


図11 祇園社境内の構成：二つの方向性と境内に並ぶ茶屋

ていたものと推測される。このように祇園林は、都市の身近に存在した非日常の空間として機能していた。

一方で、祇園北林の位置は、祇園社側から見れば本殿の背後にあたるが、北に隣接する知恩院側からは、古地図に「さくらのたうし（桜の通し）」と記される長い参道の脇にあたる（図 14^{26）}。京都府庁文書に収録されている図 13 と、知恩院に関する同様の附図^{26）}（図 15）とをつなぎ合わせれば、図 13 に示された領域と図 15 に示された領域は隙間なく隣接する。両図より「桜の通し」の側からは、祇園林を脇の並木の延長としていることが分かる。すなわち、祇園林の立場は、祇園社からは背後の森として、知恩院からは（所有関係とは関わらず）領域の延長として捉えられており、両者の間にあった自由な空間として、林の内部は野遊びの場となっていた。

（2）真葛ヶ原と東山

はじめに述べたように祇園社は、比較的市街地に近い東山の山辺下部に位置する。図 3 に示したように、祇園社の領域より東は、東山の稜線に向かって、傾斜が大きくなっている。山辺上部には、安養寺の敷地があった。ここでは 25～30%ほどの急傾斜を活かして凹凸のある塔頭庭園が造られ、近世中期以降は、その中で貸席がさかに行われた^{27）}。祇園社と安養寺の間には、図 16^{28）}のように視野の開けた土地「真葛ヶ原」が存在した。

真葛ヶ原が山辺上部と下部の間に広がっている事は、結果として視覚的に機能する空隙の存在を意味していた。祇園社の側からは、東山の山容に馴染む安養寺の塔頭の連なりとそこで遊ぶ人々を眺めることを可能にし、安養寺からは、都市との間に存在する広大な森と社周辺の賑わいを見下ろすことを可能にした^{29）}。すなわち、山辺に大きく開かれた空間が、向こうの自然とこちらの都市を互いに引きつける役割を果たしていたと捉えられる。

6. 結論 — 山辺における祇園社の位置づけ

以上のように、祇園社周辺の景観は、祇園社境内から始まる縦横の二つの経路を軸として、それぞれの門前に遊里を形成し、さらにその経路から外れて境内の北と東の奥には、林間に自由に広がる遊興空間が出来ていた。

南北方向の経路は、南へ延びて山辺に点在する高台寺や清水寺などの社寺領域とつないでいた。すなわちこのルートは、社寺巡りの観光性が高く、それ自体が市街地から離れた場所を亘る非日常性を持っていた。

一方東西方向の経路は、洛中から鴨川を渡り、緩やかな傾斜に従って山へ接近する、段階的に非日常へ至る道であった。その過程には芝居小屋、茶屋が連なり、その奥の祇園社の存在を一層華やかなものにしていった。

さらに境内は二つに分かれ、主要な北東部に対して、

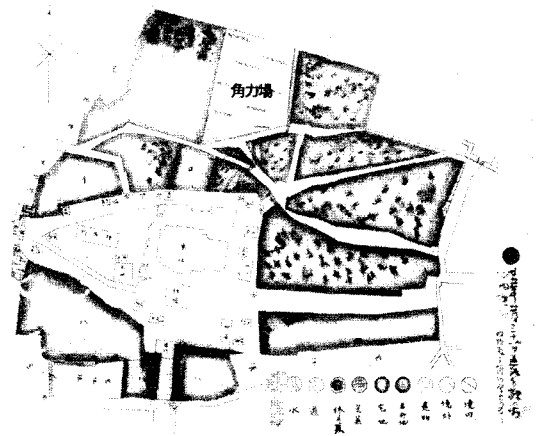


図 13 八坂神社境内外の平面図



図 14 知恩院「桜の通し」と近接する祇園北林

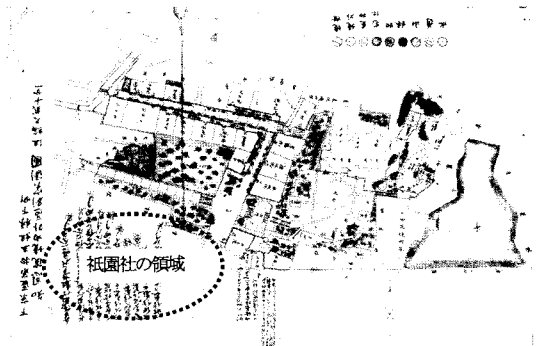


図 15 知恩院境内外の平面図

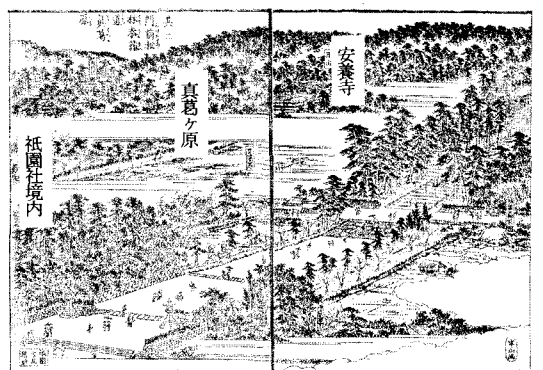


図 16 祇園社と東山（安養寺）の間に開けた真葛ヶ原

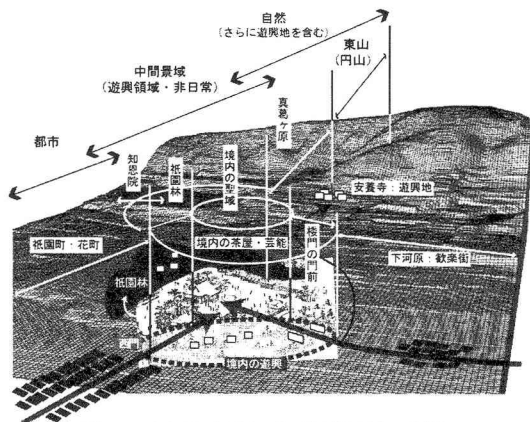


図17 まとめ (山辺における祇園社の立場)

南西部は二つの門をショートカットするルートを持ち、これに沿って境内の茶店が並ぶ遊興空間を形成していた。

これらの軸に沿って内に入り、本殿を越えると、本殿の背景にみえた林は包容力のある遊び場であり、都市にとっては身近な自然の領域であった。その東側には広い空地（真葛ヶ原）を備え、視界は山辺上部の遊興地（安養寺）と円山の稜線へと広がっていた。また北側は、土地の所有に関わらず、隣の知恩院と空間を共有していた。

つまり、山に対しては導入部にあたり、この導入の領域を広く周囲と共有して非日常空間を形成し、街に対しては鴨川東郊外に広がる遊里とつながりのものとして認識されていたものと解釈できる（図17）。

参考文献

- 1) 出村嘉史：近世の京都円山時宗寺院における空間構成に関する研究，土木計画学研究論文集 No. 2, pp. 387-394, 2001
- 2) 山田圭二郎：地形文脈における敷地マネジメントに関する景観論的研究，京都大学工学研究科博士論文，2002

- 3) 例えば、「近代京都における市街地近郊山地の「公園」としての位置づけとその整備」（中嶋節子：日本建築学会計画系論文第496号，1997）や、「近代京都の東山地域における別邸群の初期形成事情」（矢ヶ崎善太郎：日本建築学会計画系論文第507号，1998）など
- 4) 平凡社編：京都市の地名，平凡社，pp. 196-198, 1979
- 5) 前掲 京都市の地名，p. 210
- 6) 林屋辰三郎：江戸時代図誌京都，筑摩書房，pp. 80-81, 1975
- 7) 京都市編：京都の歴史第五巻，p. 476, 1979
- 8) 前掲 京都市の地名，p. 203
- 9) 狩野博幸：円山應舉画集，京都新聞社，p. 23, 1999
- 10) 駒敏郎：史料京都見聞記三 十国巡覧記，p. 134, 1991
- 11) 大久保正：本居宣長全集第十六巻 在京日記，筑摩書房，pp. 75-115, 1974
- 12) 晴翁木村明啓：花洛名勝図会，須原屋茂兵衛，1862
- 13) 前掲 京都市の地名，p. 196
- 14) 前掲 京都の歴史 第五巻，p. 474
- 15) 井出時秀：京都叢書第十五巻 京都坊目誌 下京区之部坤，京都叢書発行会，pp. 298-299, 1935
- 16) 前掲 京都の歴史 第五巻，pp. 474-478
- 17) 野間光辰：新撰京都叢書 第十一巻上 祇園新地細見図，臨川書店，1987
- 18) 前掲 円山應舉画集，p. 22
- 19) 京都市編：京都の歴史 第六巻，p. 331, 1973
- 20) 前掲 在京日記，p. 94
- 21) 中村幸彦：新編日本古典文学全集 東海道中膝栗毛，凸版印刷株式会社，p. 397, 1995
- 22) 前掲 京都市の地名，p. 203
- 23) 京都市編：史料京都の歴史10，平凡社，p. 179, 1987
- 24) 前掲：花洛名勝図会
- 25) 図は京都府立総合資料館所蔵の京都府庁文書「八坂神社境内外区別実測図（社寺境内外区別取調42）」であるが、角力場の場所は同文書の「境内御増加願（社寺土地事件8-39）」に明記されている。
- 25) 「改正京町絵図細見大成（1831年）」（『慶長昭和京都地図集成』大塚隆，柏書房，1994. 6 14-B）
- 26) 京都府庁文書：知恩院境内外区別実測図（社寺境内外区別取調42-2），京都府立総合資料館所蔵
- 27) 前掲 近世の京都円山時宗寺院における空間構成に関する研究
- 28) 前掲 花洛名勝図会
- 29) 出村嘉史：近代京都の円山公園における景観構成の分析，土木学会論文集 No. 744, pp. 93-100, 2003

近世の祇園社の景観とその周囲との接続に関する研究*

出村嘉史**・川崎雅史***

本論文では、京都の東山と洛中の中間に位置した近世の祇園社とその周辺において、名所図会などの絵画史料や紀行文などの文献史料から、近世を通して培われた境内と境外の景観の構成と、その接続関係を示した。近世祇園社の領域は、概ね境内、二つの門前、林地の各部分から構成され、南側と西側にそれぞれ門前町を有した。これらの領域では、二つの門に対応する日本の交わる軸を持ち、これらに従って構成されていた。それぞれの場に応じて、庶民的な遊興と参詣の行為とが混合した独自の利用法が確立されていた。このようにして、洛中から東山に至る間の段階的な境界領域を、広い山辺の中に形成していたことが明らかになった。

Landscape of Gion-shrine & Juncture with Surroundings in Edo Era*

By Yoshifumi DEMURA**・Masashi KAWASAKI***

This paper explains the composition of the region around Gion-shrine, Kyoto in Edo era. After an analysis of old pictures and documents made in Edo era, the structure of its landscape was appeared. The close of Gion-shrine consisted of 4 parts; a main premise, a back wood, and two gates with each town before them. Two axes penetrated into this whole region creating relation with the areas, in which particular activities were arouse. As a whole, this region could be regarded to play a role of an effective boundary harmonizing the down town and the environment of the mountain.